おっぱいおいしい？

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
おっぱいおいしい？

【Ｎコード】
Ｎ８９０４ＨＰ

【作者名】
ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
カニバリズムはしっかりと調理をした上で食べる様子を食材提供者に見せてあげるパターンが好きです
※この作品は以前ｐｉｘｉｖに投稿したものと同じ内容になります

「なんで私縛られてるのっ！？……お願い！こんな事やめて家に帰してっ！！」

下校途中に突然車に連れ込まれ、そのまま気絶させられてしまった私。

目が覚めるとそこは知らない部屋で、更に身体は椅子に縛られて一切動かせない様に拘束されていた。

「目的は何なのよ！お金目的の誘拐ならウチにそんな大金なんて無いわ！！それとも私をレイプする気なのっ！？」

こんな事になっている理由すらも分からないのが不安で、おそらく近くにいるであろう誘拐犯に向かって私は問いかける。

今も制服はちゃんと着ている以上すでに犯されてしまったということはなさそうで、そこは少しだけ安心材料だった。

そんな私の声が聞こえたのか、奥の扉が開いて誘拐犯が姿を表す。

口元以外は仮面で隠されていて顔は見えなかったけど、背格好や髪型、声などからおそらく性別は男だと判断する。

「あ、起きた？目的はそうだなぁ、キミで……あぁ間違えた、キミと食事がしたいって感じかな」

「食事……？それだけのために私を攫ったっていうの？」

「まぁそんな感じだよ。ちょうどさっき料理が出来上がったし、早速一緒に食べようよ。あ、食べ終わったらちゃんと解放するしそこ

は安心しててね」

そんな会話をしている間に誘拐犯は一枚のお皿を持ってくる。美味しそうな匂いをさせているそのお皿には一見すると豚の角煮のような料理が乗っているけれど、お肉自体は見たことのない形をしていた。

その見慣れないお肉はお椀を伏せたような半球状の形で、更にその頂点には突起のような物がついている。その形にはひとつ心当たりがあるけれど、それがお皿の上に乗っているという状況に理解が追いつかない。

「えっ……それは何……？」

「本当はわかってるんじゃないの？キミが想像した通りの物であってると思うよ？」

「じゃあ本当におっぱいなの……？あっ……もしかして豚のとかそういう？」

私の想像どおり、その肉はおっぱいで間違い無いようだった。頭の中でガンガンと警鐘を鳴らし続けている嫌な予感を否定したくて、私は誘拐犯との会話を続けてしまう。

「何言ってんのさ。正真正銘人間のおっぱいだよ、に　ん　げ　んの。美味しそうに煮込めてるでしょ？」

「なにそれ……人間のおっぱいを食べるなんて……狂ってる……」

「あれ？もしかしてまだ気付いてないの？このおっぱい、＜誰＞の

物だかわかってる？」

誰のおっぱいか？その言葉にハッとして自分の胸元を確認する。服を着ているから直接見えるわけではないけれど、たしかに何か違和感がある気がした。

胸の感覚に集中してみると、右の乳首に制服の裏地が直接あたっているような感触がある。どうやら眠っている間にブラジャーは外されてしまっていたらしい。でも、右と同じく裏地に当たっているはずの左の乳首からは、何故かその感触が感じられなかった。

目の前にある煮込まれたおっぱいと、あるはずの感触が感じられない左胸。それらの状況を認識し、私の頭の中で鳴り響く警鐘はどんどんと大きくなっていく。

（嘘……だよね……？あのおっぱいが私のだなんて……そんな訳ないよ…………）

切り取られた人間の一部、それもおっぱいが丁寧に煮込まれてお皿の上にあるという異常な光景に、吐き気すらこみ上げてくる。それでも私は目の前のお皿から目線を外すことができず、そこに乗った肉が自分の物ではないという確証を探すように、料理に成り果ててしまっているおっぱいを穴が空くほど観察してしまう。あれは自分のおっぱいではありませんように……しかしそんな願いも虚しく、私はある物を見つけてしまった。

（あの二つ並んだホクロ……私の左胸にもあるやつだ…………っていうことはあれは本当に……？）

煮込まれて色が変わってしまったおっぱいであってもしっかりと見

えてしまった二つの黒い点は、たしかに私の記憶にあるホクロの位置と一致していた。

「嘘だウソだうそだ……あれが私のおっぱいなんてあり得ない……
……私のじゃないワタシのじゃない……違う違う違う……」

ほとんど現実逃避のようにブツブツと呟き続ける私に近づいてきた誘拐犯は、制服に手を伸ばして乱暴に脱がせようとする。

「まだ信じられないの？じゃあ直接見せてあげるよ、ほらっ！」

「やめっ…………あっ！あぁぁぁっっ！！！……無いっ！私のおっぱいっ！！イヤァァァァッッ！！！！」

引きちぎる様に服を脱がされ、上半身がさらけ出される。
あらわになった私の胸は左側だけが完全に平坦で、左乳房があったはずの部分にはただ単にガーゼが貼られていた。右側のおっぱいは今までと変わらずに私の胸に存在していて、左右でのアンバランスさがハッキリとわかってしまう。おっぱいが付いている右側と付いていない左側のギャップが、乳房が失われてしまった現実をより強調しているようにも見えた。

左のおっぱいが切り取られてしまった。もう二度と元に戻ることはない。そんな取り返しのつかない事になってしまった絶望感と喪失感に私はすすり泣く。

「うぅ……どうしてこんな酷いことするの……？女の子の大切なおっぱいを切り取るなんて……グスッ………切り取っちゃったらもう元には戻らないんだよ……」

「どうしてって……食べたいからに決まってるじゃん。女の子の大切な部分だからこそ、それをお肉として消費しちゃう贅沢さがたまらないんだよね」

最悪だ……おっぱいを切り取って食べることそのものを楽しむような変態だったなんて……
レイプされたらどうしようなんて考えていた時点で甘かったんだ。こんな頭のおかしい奴だったなんて思わなかった。
もう私はここで殺されてしまうのかもしれない。

「あ、最初に言ったとおりボクはキミと食事を楽しみたいだけで、命まで奪うつもりはないからそこは安心してね。ちゃんと食べ終わったら解放してあげるのは約束するよ」

殺されてしまうかもという考えを表情から読み取ったのか、誘拐犯は私を安心させるような事を言ってからおっぱいの角煮を切り分け始める。でもこんな狂人の言うことなんて、私には一切信用できない。

乳首の頂点から入れられたナイフは煮込まれて柔らかくなった乳房の肉をいとも容易く切り裂いて、あっという間におっぱいを真っ二つに切り分けてしまう。
更に誘拐犯はふたつに切り分けられたおっぱいの片方を自分の取皿に取り、ステーキと同じようにナイフとフォークで一口大の大きさに切り分けていく。

縦半分にされたことで見えるようになってしまった私のおっぱいの断面図。普通に生きている限りは絶対に見ることはなかったであろうその光景と、目の前でおっぱいがただのお肉として切り分けられていく状況が現実だなんて到底信じられない。

けれどもリアルすぎる肉の見た目や香り、そして何よりも軽くなってしまった左胸の感覚が、その光景は夢なんかじゃないと鮮明に伝えてきた。

（あぁ……おっぱいの中身が丸見えだ……皮の内側には脂肪と、あれは乳腺……？赤ちゃんの為に母乳を作る大切な所なのに…………やめてよ……私のおっぱいこれ以上切らないでよ…………）

そんな私の思いも通じる事は無く、誘拐犯は切り分けたおっぱいを口に運んでいく。

高級なお肉を堪能するようにモグモグと口を動かし、その味に満足したような嬉しそうな表情をすると、最後にはゴクリと飲み込んでしまう。

切り落とされて煮込まれてしまった時点で、もう私のおっぱいは元通りにならないのはわかっている。でも、噛み砕かれて飲み込まれてしまうと、おっぱいがこの世から完全に消え去ってしまったように感じてさらに悲しみが強くなる。

「うーん、美味しい！やっぱり女子高生のハリのあるおっぱいは最高だね！！脂肪も甘い上にクドくなくて、乳腺の味も食感もバッチリだ！！！これならパクパク食べられるよ！」

モグモグ……ゴクリ、モグモグ……ゴクリ。

その言葉の通り、誘拐犯は次々に私のおっぱいを食べ進めていく。喉が動くたびに私のおっぱいが存在した証が消えていくような気がするのがとても悲しくて、でも自分の一部だった物の最期の瞬間から目を逸らす事はどうしてもできなかった。

「目の前で自分の一部が食べられてる子の絶望した表情ってそそるなぁ……あ、次は乳首だね。ボクはここがおっぱいの中でも特に好きなんだ。コリコリとした食感も勿論だけど、女の子のおっぱいの中でも特に隠すべき重要な部分を食べちゃうっていうのが堪らないよね」

「やめてぇぇぇっっ！！そこだけは、乳首だけは食べないでよぉぉ！！！」

私の絶叫も意に介さず、誘拐犯は半分になった私の乳首を口元に運ぶ。でもいきなり口の中には入れずに、フォークに刺さったままの乳首を愛撫するかの如く、ペロペロと舐めたり吸い付いたりして楽しそうにもてあそんでいる。

そんな光景を見て、私は今までの人生で乳首を男の人に弄られたりしたことはなかったということを思い出す。彼氏とかがいた事は無いし、そもそもおっぱいを家族以外の男の人に見せた事すらない。いつかは自分もするんだと考えていて、興味だってもちろんあったエッチな事。好きになった人にやさしく愛撫されて、気持ち良くしてもらうんだって思っていた。でも、私の人生初めての愛撫は切り離された乳首に対する独りよがりな代物で、気持ち良くないどころかただひたすらに悲しくて怖い物になってしまった。

（おっぱいが片方無い女を好きになってくれる人なんているのかな……？というかこんな身体もう人に見せたくないよ………温泉とかもう行けなくなっちゃった……）

色々と思考が回ったことで、今後の人生を乳房がひとつ欠けた身体で生きていくという事の重大さを実感してしまう。たまに病気とかでおっぱいを失った女性の話を目にすることはあっても、それはど

こか他人事で自分には関係ないと思っていたし、おっぱいが無くてもそこまで不便じゃないからあんまり気にしなくても良いんじゃないかとすら考えることもあった。
しかし、実際に自分がそうなってしまうとその考えが間違いだったと強く実感する。不便じゃないから大丈夫とか全然そんな事はない。女の子の象徴のひとつであるおっぱいが失われてもう二度と戻らないという喪失感は、私の女としての自信を大きく奪い去ってしまった。

私が色々と考えている間に、私の乳首は誘拐犯の口の中に消えていた。特に好きと言っていた言葉の通り、今までよりもじっくりと味わう様に口を動かしているのが私からもよくわかってしまう。

十分に乳首の味を楽しんだ誘拐犯は、私に意味ありげな目配せをしてから大きく口を開けてその中を見せつけてくる。
誘拐犯の舌の上に乗っているグチャグチャの肉片、それは私の乳首の成れの果てで間違いなかった。大切な身体の一部が無残な姿になってしまった光景に、私の目からは涙が溢れて止まらなくなる。

(私の乳首……ただのミンチになっちゃった…………あぁ……大切な乳首……)

口を閉じてミンチになった乳首を飲み込む。私の反応はとてもお気に召したようで、満面の笑顔を作った誘拐犯はおまけだと言わんばかりにもう一度口の中を見せつけてくる。

(無い……肉片すらも全部なくなっちゃった…………私の乳首、胃の中でどんどん溶かされてるんだ……)

「興奮しちゃう反応ありがとね。やっぱりただ食べるだけじゃなく

てこうやって本人のリアクションを楽しむのが、女の子のお肉を食べるときの醍醐味だよねー」

好き勝手な事を言ってくる誘拐犯。まるで女の子を何度も食べているかのようなその発言に、今までも私と同じ様に食べられてしまった子がいるんじゃないかと考えて怖くなってしまう。

その後も私のおっぱいはハイペースで誘拐犯の胃の中に消えていき、あっという間に取皿に乗った分は全部平らげられてしまった。

「ごちそうさま！キミのおっぱいすっごく美味しかったよ、ありがとう！！……じゃあ次はキミが食べる番だね」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

（えっ……これで終わりじゃないの……？私の番ってどういう事……？）

食後の挨拶と共に唐突に告げられて言葉に、私は混乱する。

これで終わりになるのではという期待はどうやら外れてしまったみたいだった。

「覚えてない？ボクはキミと食事がしたいって言ったんだよ？だから、キミにも食べてもらわないとね」

「私も食べるって……何を？…………っ！？まさかっっ！！！」

「おっ、理解したみたいだね。ご想像の通りキミにはこれから自分のおっぱいを食べてもらいまーす！」

誘拐犯は楽しそうにそう宣言をしてから、残っていたおっぱいのもう半分を切り分けて私の口に近づけてくる。

（人間の肉、それも自分のを食べるなんて出来るわけ無いじゃない……どうやったらそんなひどい事を思いつくの…………？）

自分の体の一部を自分で食べる。そんな悍ましすぎる行為なんて絶対にしたくない私は、必死に口を閉じてその肉片を受け入れないように抵抗する。

唇に押し付けられる煮込まれたおっぱいのブヨブヨとした感触、温かさや料理としての匂いがひたすらに気持ち悪い。元は自分のおっぱいだけれども、いや、だからこそ私はこれを食べてしまう訳にはいかないと、肉片の侵入を拒み続ける。

「ちゃんと食べられたら約束通り解放してあげるんだけどなぁ。あ、もしかして煮込みは嫌いだった？それなら別の作り方で新しい料理を用意するね！」

料理の好き嫌いの問題では無いことは当然わかっているくせに、わざとらしくそんな事を言ってくる誘拐犯。あまりにも楽しそうなテンションに、なぜだかとても嫌な予感がした。

「次もおっぱいだとつまらないから、別の部位を使ったほうがいいよね。うーん……手足？眼球？それともおまんことか？」

「えっ……？」

「よし、決めた。おまんこにしよう！大陰唇から膣口まで割れ目全部を綺麗に削ぎ落としてあげるね！」

「ひっ……！わっ、わかりました！食べます！おっぱい食べます！！だからこれ以上切らないでくださいっ！！！」

食べなければ更に身体を、それもおっぱいよりもずっと大切とも言える女性器を切り落とすという宣告に、私は慌てて口を開く。
こいつに逆らってはいけない。機嫌を損ねたら何をされるかわからないが、死ぬよりももっと酷い目に会わされてしまうのは確実だろう。そんな恐怖に負けた私は、口調すらも丁寧になって誘拐犯の要求を受け入れてしまう。

「わかってくれたみたいでうれしいよ、美味しく出来てるからちゃんと味わって食べてね。はい……あーん」

意を決して開けた口の中に、私のおっぱいだったモノが入れられる。
自分の一部が口の中にあるという状況はそれだけでとても気持ち悪く、今すぐにでも肉片を吐き出したくなってしまう。

（ぐぅ……気持ち悪い……でも吐いちゃ駄目、吐いちゃダメ、吐いちゃだめ………吐いたら次はおまんこが無くなっちゃう……）

わきあがる嫌悪感を、吐いたらもっと酷い事になるという恐怖で必死に抑え込む。かといって噛んだり飲み込んだりという食事としての次の段階に進むこともできずにただ硬直しているだけの私に向けて、誘拐犯からの新たな指示が飛んでくる。

「ほらほら、口に入れただけじゃ食べたことにはならないよ。ちゃんとよく噛んで、味わって、最後には飲み込まなきゃ」

恐怖で硬直してしまっている舌と顎をぎこちなく動かして、口の中

のおっぱいを奥歯で挟み込める位置に移動させる。舌に感じる味自体はちゃんと角煮の物なのがかえって気持ち悪さを増幅させるけれども、それをなるべく考えないようにしながら無心でおっぱいを噛み潰していく。

おっぱいからブチュブチュと肉汁が流れ出だし、口の中を満たす。丁寧に煮込まれているおっぱいはとても柔らかくなっていて、大した抵抗もなく私の歯によって歪み、潰れていってしまう。

(あぁ……噛んでる……自分のおっぱい、自分で壊しちゃってる……ごめんね……私のおっぱい……でも仕方ないの、許して……ごめんね……ごめんね……)

自分の左おっぱいへ謝罪の言葉を内心で繰り返しながらも、私は徐々に顎に込める力を強くしていく。

どんどん溢れてきてしっかりと味覚を刺激してくる肉汁は口の中に溜め込みきれなくなり、ついに私はそれを飲み下してしまった。

(肉汁……飲んじゃった……人間を、本当に食べちゃったんだ……
……)

やけに頭の中に響くゴクリという喉の音は、私が超えてはいけない一線を踏み越えた音で間違いない。

人としての禁忌のひとつである人肉食を自分が犯してしまったという事を改めて認識してしまい、今までよりも遥かに強烈な嘔吐感に襲われる。

「うぷっ!ダメっ……!ぐっ、おぇぇぇぇっっ!!!」

やってしまった……我慢しきれなかった………人肉食の嫌悪感に

耐えられず、全部吐いてしまった……
今日はお昼ごはんを抜いていたので胃の中身が逆流することはなかったけれども、口の中にあったお肉は全部床に溢れてしまっている。
嘔吐感が一通り落ち着いた後、恐る恐る誘拐犯の顔を確認する。ニコニコとした表情は変わっていないけれども目が一切笑ってなくて、私の背筋は凍りつく。
「あーあ、もったいない。やっぱり煮込みは吐くほど嫌いだったんだね。気が利かなくてごめんね、次はキミが食べられるような料理にするから」
「ごめんなさい、ごめんなさい、ゴメンナサイ………」
「キミの好き嫌いを知らなかったボクも悪いしそこまで謝らなくてもいいよ。今度はおまんこを料理してあげるからちゃんと食べてくれると嬉しいな。熱々の鉄板でジュウジュウと焼いたおまんこステーキとか美味しそうだと思わない？」
必死に謝る私を無視して、おまんこの調理プランを坦々と喋り続ける誘拐犯。
冗談とは全く思えないトーンの口調と具体的な内容に、私の脳内にも削ぎ落とされたおまんこが焼かれていく映像が浮かんできてしまい、全身がガクガクと震え始める。
「大陰唇の脂肪はおっぱいとはまた違った味がするし、クリトリスや小陰唇の独特な食感もたまらないんだ。あ、キミ確か処女だったよね？膣口に張った処女膜も食べられるなんて嬉しいなぁ」
「もう吐きません……おっぱい全部食べます……だから私のおまん

こは許してください…………お願いします……」
「知ってる？　おまんこって鉄板で焼くとくぱぁってだんだん開いてくるんだよ。アワビみたいで面白いよね」
　より詳細に語られるおまんこの末路に私の心は限界を迎え、恥も外聞もなく泣き叫んで許しを乞い始める。
「うわぁぁぁん！　いやだぁぁっっっ！！　おまんこ取らないでよぉぉぉっっっ！！！　ちゃんとおっぱい食べるからぁぁぁぁぁ！！！！！」
「おっ、そこまでお願いするならもう一回チャンスをあげようかな」
「えっ……？　ひぐっ……ぐすっ…………おまんこ許してくれるの……？」
「ボクも鬼じゃないからね、今度こそ吐かずにおっぱいを食べきったらそれで解放してあげるよ。でも、また吐いちゃったら本当におまんこ食べちゃうからね？」
　どうやら私のおまんこはまだ股間に付いていることを許されたらしい。
　必死に頼み込んで手に入れた最後のチャンスを無駄にするわけにはいかないと、私は自分のおっぱいを食べる覚悟を決める。
「はい……わかりました……ありがとうございます…………おっぱい食べさせていただきます……」
「じゃあ早速次の一口いこうか。はい、あーん」

目の前に差し出される一切れの肉を、自分から口を開けて受け入れる。

（これはただのお肉……ただのお肉……ただのお肉………おっぱいなんかじゃなくて豚の角煮なんだから食べたって問題無いんだ……大丈夫……大丈夫……）

頭の中で繰り返し繰り返し、自分が食べている物はおっぱいではなく豚の角煮なんだって自己暗示をする。

心を殺して機械的に肉を噛み潰し、豚肉とは何かが違う食感を思考から追い出して違和感ごと飲み下す。

（よしっ……飲み込めた………吐いてない……大丈夫……この調子この調子……）

「いい食べっぷりだねぇ。まだまだあるからしっかり食べてね、ほら、あーん」

パクッ……モグモグ……ゴクリ……

パクッ……モグモグ……ゴクリ……

何も考えないように無心でひたすらに食べていく。

この角煮が料理としてちゃんと美味しいは不幸中の幸いだった。少なくとも不味くて食べられないという事が無いのはこんな状況ではとてもありがたい。

「食べてくれるのは嬉しいんだけどさ、何も喋らないっていうのもちょっとつまらなくなってきたなー。ねぇねぇ、せっかくだし味の感想を聞かせてほしいな」

「……っ！？あの……なんでしょうか？」

「どう？おっぱいおいしい？」

おっぱいおいしい？
その言葉で私は現実に引き戻される。そうだ、どんなに自分を騙しても食べているのは自分のおっぱいに間違いないんだった。
仕方ない状況だったとしても、自分の身体を少しだけ美味しいと感じてしまった事実に嫌悪感がこみ上げてくる。

（うぅ……ぐっ……ダメッ……！ここで吐いたら今までの頑張りが全部無駄になっちゃう………耐えろ……耐えろっ……！吐いたらおまんこ切り取られちゃうんだぞっ！！）

危なかった……ギリギリだったけど吐かずに済んだ……
でも今の一言で自己暗示は完全に解けてしまった。これから先はこのお肉が自分のおっぱいだと認めた上で、食べ進めていく他は無い。

誘拐犯はそんな一連の反応が見れて嬉しかったらしく、さっきよりも上機嫌で私に話しかけてきた。

「おー、よく耐えたね。吐いちゃうかと思ってヒヤヒヤしたよ。ところでまだ感想は聞けてないんだよね。ほらほら、おっぱい食べた感想教えてよ」

「ひぃっ……その、うぅ……美味しかった……です……」

「うんうん、気に入ってもらえたみたいで頑張って作った甲斐があったね。具体的にはどんな所が良かったの？」

「あっ、味が染みていて……柔らかいお肉とか…………噛むと溢れ出す肉汁が……良かった……です……」

「そっかー。お肉自体の味が良いのはキミのお陰だから誇っていいんだよ。上質なおっぱいを提供してくれてありがとね」

「は……ははっ……ありがとう……ございます……」

勝手に切り取って料理したくせに身勝手な言い分だとは思うけど、もう反論する気力なんて一切残ってない。

おっぱいを食材として評価されても嬉しくもなんともないけれども、私には引き攣った愛想笑いでお礼を言うぐらいしかできなかった。

「なんかボクもまた食べたくなってきちゃった。悪いんだけど今残ってる分は貰っちゃうね？　あ、乳首だけはキミが食べていいから」

「それは……乳首を食べれば終わりってことですか……？　本当に……？」

「そうそう、最後だからって吐いちゃだめだからね。さぁ、あーん」

そう言って誘拐犯は乳首の部分だけを切り分けて差し出してきて、私はそれを口で受け取る。今まで食べた肉とは全く異なる食感を舌と歯に感じながら、私は自分の乳首を何度も噛み潰して最後に飲み込んだ。

乳首を誘拐犯に食べられた時には色々な絶望感で泣いたり叫んだりしていたけれども、消耗しきった今の私にはもう泣き叫ぶ余裕なんて残っていない。自分の乳首を食べてしまったというのに、もはや

大した感情は浮かんでこなかった。

「どう？乳首っておっぱいのお肉とは食感が全然違ってて面白いでしょ？」

「はい……クニクニというかコリコリというか……そんな食感でした……」

「うんうん、そうだよねー。キミとお食事ができて楽しかったよ、ありがとね」

そんな締めの挨拶を言いながら、誘拐犯は手に持った白いハンカチを近づけてくる。

そのハンカチは最初に拉致された時に私を気絶させた奴と同じものだったから、私はまた気絶させられるのだろう。

「もうキミに会うことはないだろうから今後は安心して暮らしてね。それじゃおやすみ……バイバイ」

（あぁ……やっと終わるんだ…………よかっ……た……）

何らかの薬品が染み込んだハンカチを口に押し付けられて、私の意識は闇に落ちていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

（んうぅ……あれ……？ここ……どこ……？）

初めて見るベッドで私は目を覚ます。全体的に白くて清潔そうな部

屋と、ベッド周りのインテリアからどうやらここが病院らしいと予想をつける。

(病院……？　なんで……？　確か私は下校中で……拉致されて？……

……っ！？)

ぼんやりとした頭が動き始めて何があったかを思い出した私は、急いで両手を胸に当てる。

(あぁっ！？　無いっ！！　私のおっぱいいっっっ！！！！！)

ちゃんとおっぱいの柔らかさを感じられる右手と、ペタンとした胸板の感覚しか返ってこない左手。

左右で全く異なるその感触に、私は左のおっぱいを失ってしまったことを実感する。

(そっか……全部ホントの事だったんだ……おっぱいを料理されて

……食べられて…………それで……)

順番に記憶を呼び起こして最後にたどり着いたのは、自分のおっぱいを自分で食べてしまったという悍ましい現実。

強制されて無理矢理食べさせられたんだとしても、生理的な嫌悪感や罪悪感が消えるわけじゃない。

「うぷっ！おえぇっ……！……っ、うえぇぇぇぇぇぇっっっっ！！！

！！」

自分しかいない病室で、私は思いっきり嘔吐する。

でも吐き出されたのは胃液だけで、あの時食べされられたおっぱいは全部とっくに消化されてしまっていた。

どれだけ吐いたところで私が人間の肉を食べたという事実が変わることはないし、いくら忘れようとしてもあの時に感じた味や、自分のおっぱいを噛み潰す食感は記憶にこびりついてこの先消えることはないんだと思う。
もう私は一生肉料理を食べることはできないだろうという確信めいた予感を頭の片隅で考えながら、吐き出した胃液の後始末をお願いするためにナースコールのボタンに手をかけた。